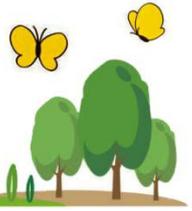


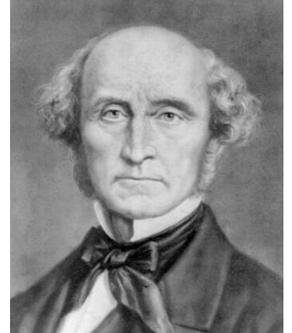


# ちょっとそこまで ～お散歩日和（名言編）～



国家の価値とは、  
究極のところ、それを構成する一人一人の価値に他ならない。

…… ジョン・スチュアート・ミル



この言葉を読んで、真っ先に思い出したのが次の一節です。

一国の政治というものは、国民を映し出す鏡にすぎません。政治が国民のレベルより進みすぎている場合には、必ずや国民のレベルまでひきずり下ろされます。反対に、政治のほう国民より遅れているなら、政治のレベルは徐々に上がっていくでしょう。国がどんな法律や政治をもっているか、そこに国民の質が如実に反映されているさまは、見ていて面白いほどです。これは水が低きにつくような、ごく自然のなりゆきなのです。りっぱな国民にはりっぱな政治、無知で腐敗した国民には腐りはてた政治しかありえないのです。

少し回り道を許してください。

恥ずかしい話ですが、その昔、勉強と言えど何から何まで覚えることでした。そのために、当時獲得した知識の中で、どうしてもよいようなことを今もたくさん覚えています。そのエネルギーをもっと他のことに費やしていたら、また少し違った世界観をもった人間になっていたのかもしれませんが。

それはともかく、当時の社会科で、明治時代のベストセラーとして「西国立志編」の題名と著者名を丸ごと覚えて試験に臨んだことをよく覚えています。もちろん中身は全く読んでことがありません。そんな暇はなかったし、そもそも図書館には本なんてほとんどなかった時代です。単なる試験対策です。



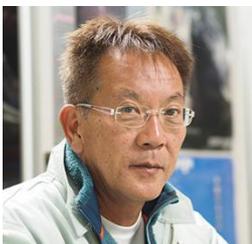
ところが、面白いのは、サミュエル・スマイルズ著「自助論」は名言の宝庫でもあったため、何かと手にすることの多い本でした。そう、中村正直著「西国立志編」とは、この「自助論」を翻訳したものだったのです。「天は自ら助くる者を助く」とはどこかで聞いたことのある言葉だと思いますが、この本の冒頭句です。そのことを知ったのはずっと後のことでした。

そして、先の一節「一国の政治というものは～」は、この「自助論」からの引用です。

よく似た西洋の格言に「その国民のレベル以上の政治はできない。」というのがありますが、同じ流れでしょう。しかし、こういう言い方は、たとえそれが真つ当な批評であっても全然建設的ではなく、どうも嫌悪感が先立ちます。

旭山動物園の坂東園長の話の方が同じことを言っているながら、前向きになれます。

動物園で働いている人は、珍しい動物を見てくださいという気持ちじゃないんだよ。どんな動物でもそれぞれが持っている「素晴らしさ」や「凄さ」を伝えたいんだ。人間だってきっと同じ。一人一人に素晴らしさや凄さがあるはずだよ。



北海道のほぼ中央の旭川市にある旭山動物園は、かつては平凡な動物園でした。しかし、坂東さんが「動物を生き生きとさせる」ために、あえて野生に戻す形にしました。その一例として、あまり仲のよくないカピバラとクモザルを同じ檻で展示し始めたことで野生の感覚を思い出し、どちらも生き生きとし始めたという

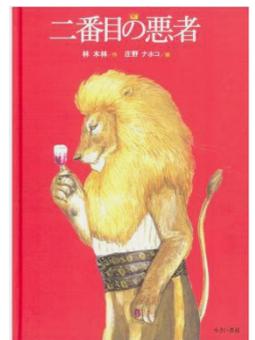
のです。これが有名な「行動展示」です。単に人気を取ろうというのではなく、どうすれば動物たちがその素晴らしさを見せてくれるだろうか。そのことを飼育員全員で考えて行動した結果なのです。

これは動物だけではなく人間にも同じことが言えるはずですが。動物がそうであるように人間にもつまらない人などいないはずだと私たちに教えてくれているのです。つまり、冒頭の言葉の「一人一人の価値に他ならない」とは、価値をどう引き出すかというポジティブな言い回しだと考えたいと思います。

ところで、この坂東氏の名前は元（げん）とおっしゃいます。したがって、時々雑誌等で「坂東元園長」と記述されているので、「あれ？代替わりして辞めたのかな？」と思うことがあります。

ついでに触れておくと、カピバラに噛まれてクモザルが死ぬ事故が2005年に起きています。原因はクモザルが徐々にカピバラのテリトリーを侵害し始めたことに拠るのだとか。そう言えば、先日、群馬サファリパークでも女兒がカピバラに噛まれています。大人しそうですが、さすが「げっ歯目」です。

巻頭の名言に関連して、どうしても紹介しておきたい本があります。人気絵本作家、林木林（きりん）さんの作品「二番目の悪者」です。あらすじは、金色のたてがみをもつ金ライオンが一国の王になりたくて、街外れに住む優しい銀のライオンを陥れていく物語です。



崩壊する王国を前に人々が言います。  
「もし、銀のライオンが王様だったら、こんなことにならなかったのに。」  
「銀のライオンに気をつけてって聞いたから、仲間に教えてただけだよ。」  
「私だって、なんとなく心配だったから、家族に知らせただけだよ。」  
「おいらだってちょっと気になって、メールを転送しただけさ。」  
金色のライオンの他には、悪意のあるものなど誰一人としていなかった。

もはや投票率が50%を切るのは当たり前という、どこかの国の実態をそのまま投影しているかのような物語です。一部始終を見ていた、空に浮かぶ真っ白い雲の言葉が響きます。

嘘は、向こうから巧妙にやってくるが、真実は、自らがし求めなければ見つけられない。

何とも不気味な味わいの絵本です。と同時に、「真実」という気になるキーワードが登場します。半年ほど前でしたか、菅田将暉主演で「ミステリと言う勿れ」というTVドラマが放映されました。主人公の久能整(ととのう)君が言います。



真実は1つじゃない。2つや3つでもない。真実は人の数だけあるんですよ。でも、事実は1つです。起こったことは1つ。

名探偵コナンの決め台詞「小さくなくても頭脳は同じ、迷宮なしの名探偵、真実はいつも1つ！」とは少々異なるメッセージです。整君の言う真実とは「主観」のことかな？適切な言葉が見つかりませんが、一般的に、事実に人は関与せず、真実には人が関与しているという違いで区別します。

「事実をねじ曲げる」「事実が判明する」に対して、「真実を打ち明ける」「真実を述べる」という言い回しがあることを如実に表現しています。「事実」は、実際に起こった事柄を指し、「真実」にはその事柄に対する人の解釈が入っているからです。または、「事実」が客観的であるのに対して、「真実」は主観的だからです。

もう少し触れますと、「周知の事実」という言葉がありますが、「周知の真実」という言葉は聞いたことがありません。「事実無根」はよく聞きますが、「真実無根」とは言いません。「真実味がある」とは聞きますが、「事実味がある」とは聞いたことがありません。「真実を告白」とはよく聞きますが、「事実を告白」とは聞き慣れません。

「事実」と「真実」を上手に見極められる人間になりたいものです。

(終)